

柔らかい漆～花器～

A2201217 清野亜紀

研究の背景および概要

漆とはとても面白く、そして美しい材料の一つである。器物の表面の塗料に使用すれば艶やかな面が出るし、物と物とをくっつける接着材としての役割もあり、大昔から日本で使われ続けてきたものの一つといってもいいだろう。しかし、今の時代、人々はこの漆という材料に自ら興味を示さない限り無縁であるといえる。現在全国にある漆の産地では新しい漆製品の提案を積極的に行っているが、現状は全く改善していないように思う。漆のイメージというのは主に「高級感(値段が高い)」や「傷をつけてはいけない」という、「近寄りがたい」雰囲気を出している。そうした面から先入観として、「扱いにくい」というイメージがついてしまっているのではないかと考える。

そこで、柔らかい表現を持った漆器をつくることによって誰でも自分から触れてみたいと思わせられるような新しい漆製品を提案し、多くの人々に「漆」というものを感じ、触れ、そして知ってもらい、「漆」というものに気兼ねなく接してもらえるようにしていきたい。

研究の目的

従来の漆製品にはない意外性を持たせたものを作り、見た目と触れたときの違いで漆の新たな触感を感じさせることが目的である。そこで、漆の特性をいかしながら「柔らかい」という視覚的触感を持たせ、人々が自分から触りたくなるような漆製品を研究し、提案していきたい。

また、それによって漆の強さや質感を体験して漆をより近くに感じてもらい、親しみの持てる素材のイメージになるようにする。

研究を進めていくうちに自分の研究内容に沿った布の柔らかい風合いが表現でき、いろんな包み方で包めることや様々な形態のものでも包むことができること、また漆と同様に日本文化の一つとして、風呂敷包みに着目した。それを使って花器を製作していくことにした。

研究のプロセス

1. 風呂敷の包み方で包む
2. 固め
3. 錆(数回)
4. 研ぎ(錆に応じて数回)
5. 固め
6. 塗り重ねる
7. 仕上げ



↑ 固め



↑ 錆



↑ 塗り前、固め



↑ 塗り

考察・感想

自分の中で最初から決めていたのは、「漆にはないような表現を出したい」ことだった。硬いというイメージを柔らかいというイメージに、扱いにくそうというイメージを触ってみたいというイメージに変えるような、そんな研究が出来たらいいと考えていた。そこから意外性持つ漆ということで、布という材料、そして風呂敷包みという方法にたどり着くまでは結構時間がかかってしまったが、納得できるような形にしていけたと思っている。

自分の作品について、思うことはいくつもある。テーマにした「柔らかい表現を持った漆器」というテーマに沿っているか、また、作品をつくる上でどのようなことに注意して作っていけばいいのかなどたくさんの不安はあった。しかし、作っていくにつれ周りが自分の求めている「柔らかそう」という反応を示してくれたことに、大きな自信がついたのは確かだったと思う。

ニーズの変化で漆文化は衰退してきているのは現状であるが、私はアッと驚くようなアイデアで新しいものを作っても、古くからあるお椀や箸の塗装に使ってもいいと思う。大学で2年間、漆というものに触れてきたがなんで2年間なのだろうと思うくらい、毎日楽しく面白く製作でき、かぶれることが出来たのでとても素晴らしい経験が出来たと思った。